2005．5．25

No.133

編集　樋口　みな子

E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
郵便振替
「銀河通信」02740－7－56535
（６号分1,000円）

野幌から初夏のたより

５月に雪が降ったところもあったほど寒い日々が続いていますが、お元気ですか？４月に東京に行く機会がありましたが、桜が満開でした。それから１ヶ月以上がたちますが、ようやく野幌では今桜が満開です。いつもなら風薫る５月ですが、春が足踏みしているかのようです。でも野幌森林公園では、雪解けを待っていたかのように、カエルが大合唱していました。ヒガラがチッ、チチチチとにぎやかに囀っています。コゲラのドラミングも森に響き、春を謳歌しているようで、たくさんの命が、活発に動き出し、春だなぁと実感します。

夫は４月から、平岸緑中学に転勤になり、３０年ぶり？！にネクタイ締めて学校に通っています。やっとネクタイが板についてきました。息子は最後の高校生活を元気に通っています。私も山に、市民運動にと忙しくしています。高山植物盗掘防止ネットワークの活動も忙しくなってきます。ささやかなことしかやれませんが、少しでも山の自然を守るために努力していきたいです。山、森と川、そこに生息する動植物のいのちも、人間も対等だと大事にしたアイヌの自然観に学びたいものです。

道北のパンケ山、ペンケ山から天北峠までとイソサンヌプリの分水嶺踏査に参加して

今回の踏査は、Ａルート４月２９日から５月１日、パンケ山、ペンケ山から天北峠まで。Ｂルート５月２日から５月４日、上豊神峠からイソサンヌプリ、知駒岳、知駒峠の２ルートに分けて長谷川リーダーと私が６日間を通しで踏査することにしました。

Ａルートは、Ｌ長谷川雄助、朝日守、鶴岡節子、サポート小栗宏の皆さんと私です。

４月２９日曇り、一時小雨　午後０時３０分、ピンネシリ温泉で旭川から参加の朝日さんと落ち合い、昼食後マップの沢林道入口を午後１時過ぎに出発。小雨が降っていて林道は、雪が溶けて川になっているようなところもありとても歩きにくい。林道が終わり沢を詰め、パンケ山に通じる尾根を登りましたが、１７時０５分、風も当たらず、やや平坦な場所をみつけてテントを張りました。もう夕暮れでした。帰ってから距離を計測したら６．６キロも歩いていたことがわかりました。

雨で濡れましたが、ストーブを焚き、ワインと豚シャブで元気を取り戻しました。キャベツ、肉、もやしや、たれなど食材は重かったですが、持ってきた甲斐がありました。翌日のエネルギーになるのですから。

４月３０日曇り　４：００起床。６本爪の軽アイゼンをつけ、ザックにスノーシューを乗せて、パンケ山の急斜面を目指しましたが、ハイマツが行く手を塞いでおり断念しました。分水嶺を辿り、ペンケ山を目指して進むがペンケ山北コル手前で、今通り過ぎたばかりと思われる鮮明な大小の熊の足跡を発見。親子熊は危険です。笛を吹き鳴らし、私たちの存在を知らせるが４人なので心強くもありました。

ペンケ山の北コルに着くと、そこには木もろとも雪崩れたデブリがあり、乗用車一台分ぐらいの大きな雪塊がゴロンゴロンと横たわり、そのすさまじさに息を呑みました。リーダーが「ペンケ山の稜線には、ガスがかかり、ルートも見えない。張り出した雪庇が落ちそうだ」と説明。ペンケ山の踏査を断念し、雪崩を避けて裾野を大きく迂回することを決め、樹林帯を通ってペンケ山の南コルに出ました。ペンケ山の頂上付近の稜線には幾筋もの亀裂があり、暖気が来れば一気に落ちてくる斜面の様相です。今はまだ雪が締まっている状態であり、慎重にかつ素早く通過しました。

難所を通過し、今度は、標高２００ｍから３００ｍ の明瞭な尾根筋のない森林帯に入りました。こういうところでは何度もＧＰＳと地図、コンパスで分水嶺を確認しなければなりません。リーダーの苦労が手にとるように伝わってきました。

三町界は、その名のごとく三町に別れている分岐点なのですが、尾根が明瞭ではないのです。　来てみなければわからない苦労が、今回の分水嶺踏査でもありました。標高の低い分水嶺がどんなに大変なものか、行きつ戻りつしてルートを探すリーダーのザックを少しでも軽くしてあげられたらと思わずにはいられませんでした。

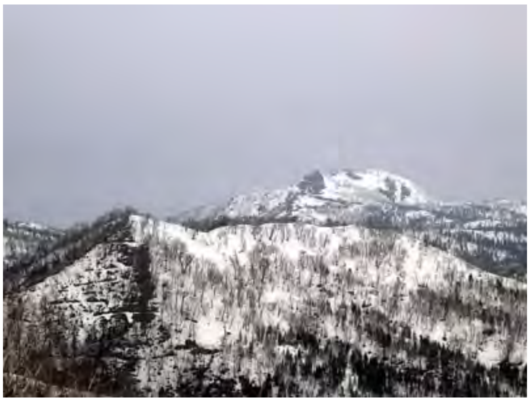
１０時間の歩行で、テント適地に至りようやく荷を下ろすことができました。

テントを張り終え、今夜は少しのんびりしようと、まずはお茶で一服。夕食は、今回初めてキムチ鍋をメニューに加えました。簡単で、美味しく、しかも体があたたまり好評でした。

５月１日曇り　４：００起床。朝スパゲティをゆでてから、ミートソースを車の中に忘れたことに気づきました。ウインナーソーセージを、魚肉ソーセージと間違うし、どうしよう！と思案していたら、鶴岡さんの「インスタント味噌汁を使ったら！」と鶴の一声！主婦の感覚は素晴らしいです。新しい味だと絶賛を浴びたのでした。疲れた中にも笑いありです。アップダウンのジグザグ道を進みＰ４０３に到着。ここから６．１キロを何度もＧＰＳで確認しながらＰ２６１．７のピークにようやく到着しました。三角点のあるピークなのですが、探しても見つからない。ルートから少し外れた笹薮の中にある標柱を、鶴岡さんが発見したのです。

もちろんＧＰＳでここら辺と確認した所だったのですが、雪解けで、笹薮から顔を出していたのが幸いでした。三角点の石を皆でなでて出発。
３時過ぎ。天気は下り坂。今にも雨が降り出しそうになり、リーダーの足が早くなり一気に緊張が高まりました。雪が腐れてきてつぼ足では踏み抜くことが多くなり、スノーシューに履き替えます。木が密集しだし、ＧＰＳを片手にリーダーが先に進む。私たちは、地図で凡その現在地はわかりますが、行く手が分からないのです。
　そうこうするうちに雨も降り出し、目指す天北峠がとてつもな遠く感じられました。いつ着くのだろうかという不安は少しはありましたが、私たちはリーダーへの全幅の信頼感を持ち、黙々と付いていきます。行く手に微かな車の音が聞こえた時「ああ、人里は近い。ルートは間違っていなかった」とホッとしました。
　１７：３０にようやく天北峠に到着。
　サポートの小栗さんとともに、思いがけず５月２日からＢルートで行動を共にする鈴木貞信さん、美紀さん夫妻が現れて、山中２泊３日の長い長い分水嶺踏査を終えた感激の堅い握手。
　１１時間に及ぶ踏査でした。１５キロ近いザックの重さがずしりと肩に食い込み、荷を降ろした時の爽快感は忘れられません。
　前半のＡルートを終えて、温泉に入り、薪ストーブのあるロッジに泊まり、元気を取り戻すことができました。
　Ｂルートは、長谷川さん、私に新たに鈴木貞信さん、奥さんの美紀さんが加わりました。
　この日はピンネシリ道の駅隣のロッジに泊まりましたが、小栗さんが、薪ストーブを焚き、温かくしてくださり、濡れたテントやシュラフも乾かすことが出来、布団まで用意されていて、３日間の疲れが癒されました。
　夜は、雷がなり、雨も激しく降っていましたが２日の朝は晴れ。ここで、鶴岡さんは帰札。
　７時半に小栗さんと朝日さんが、サポートでロッジを出発。上豊神峠（幌延ー頓別線・道々５８３号線）からイソサンヌプリ～知駒岳の踏査に入ろうとしましたが、北大演習林のゲートがあって中に入れず、別のルートから入れないか２ヵ所の林道を調査するために、さまざまにアプローチしました。道々８４号線からの林道は除雪しておらず通行不能。しかも稜線には雪がなくブッシュがむき出しになっているため、踏査計画を山中１泊で知駒峠から、イソサンヌプリ往復に変更しました。なんとクッチャロ湖まで走ったのです。白鳥も見れたのはラッキーでした。２時間半のドライブを楽しみ？Ｒ２７５を南下して知駒峠に戻りました。

身支度を整え、１０時２５分出発。雪は締まっておりつぼ足で登る。ほどなく、知駒岳に到着。そこからは気持のいい大雪原を歩き、Ｐ４５３に到着。青空が広がり、３０日には雲に閉ざされて望むことができなかったパンケ、ペンケが相似形のように屹立して美しい山容を眺めながらの歩きは快適でした。パンケ山は下流側の山、ペンケ山は上流側の山の意であり、なるほど高い方がペンケだと、アイヌの人々の命名は理にかなっていると感心しました。Ｐ４５３のコルからいよいよイソサンヌプリを目指しますが、亀裂が入って雪崩れそうな斜面のトラバース、壁のような急斜面が現れ、アイゼンを装着して慎重に歩を進めました。



尾根に出ると風速３０メートルは優にあるかと思われる突風に、足元がふらつき緊張しましたが１５キロのザックの重みがストッパーになりました。
　歩き出して約６時間後の１６：１８分、頂上に到着。５８１．４ｍのイソサンヌプリは南西の風が吹き荒れていました。人を寄せ付けないような厳しい山です。
　イソサンヌプリはどんな意味があるのか、知里真志保のアイヌ語辞典で調べてみました。イソとは水中の波かぶり岩の意味があり、海または川の中にあって、時化れば隠れ、なぎれば現れる平たい岩とあります。サンは山から浜に吹きおろす風の意であり、いつも強風が吹いて姿を隠している山のようです。
　頂上から、左手に鉛色のオホーツク海が見え、右手には幾重にも重なる山並みの彼方に日本海がある分水嶺に立ち、道北ならではの光景に感激を新たにしました。

５つのピークで形成された山塊が厳しくも美しく目の前にありました。一等三角点の前で、４人で堅い握手を交わし記念撮影をして、急いで下山開始。Ｐ４３５近くの風の当たらないテント場に着いたのは１７：３０分。貞信さんがＧＰＳを見ながら「ここは北緯４５度００分だ」と教えてくれました。偶然とはいえキリのいい数字です。目的を達成した安堵で、特製リゾットとワインで乾杯し明日への鋭気を養いました。
５月３日晴れ。今日は同じコースを戻るだけ。ゆっくりと８時にテント場を出発。小さなアップダウンはありましたが、快適に下山し１１：３０分、知駒峠に到着。小栗さんの迎えの車もほとんど同時に着くというタイミングは、地元の人ならではの土地勘に感謝です。

イソサンヌプリの頂上にて

ここで分水嶺踏査は終わる予定でしたが、長谷川さんが天北峠のやり残しの分水嶺を歩きたいとの提案で、ピンネシリ温泉で昼食後、天北峠に戻りました。１３：３５分出発、国道沿いの分水嶺を歩き、１７１．６ｍの三角点を探しましたが、積雪のため発見できませんでした。そこから引き返し、天北峠への分水嶺を歩き、オホーツク海と日本海に流れる源流をみながら１４：５０分に踏査を無事終えました。
歌登グリーンホテルで２日間の汗を流し、小栗さんの自宅で、手打ちそばをご馳走になりました。太くて野趣たっぷりの蕎麦は本職に引けを取らない美味しさで、小栗さんの人柄もにじみ出て、至福のひとときでした。
前半のＡルートに後半のＢルート１泊２日のイソサンヌプリとあわせて、分水嶺は、２９．９ｋｍ、分水嶺以外の距離は１７ｋｍで、総距離にして４６．９ｋｍ歩いたことになります。
テント生活は、人間本来の野生を取り戻してくれるようです。くたくたに疲れて、食事がこんなに美味しいものかと思ったし、不眠症気味の私がぐっすり眠れました。最初は風の音が、ゴウゴウとうなり、怖いなあと思いましたが、いつの間にか子守唄になっていました。足も鍛えられましたが、心も鍛えられたようです。少々のことではへこたれない忍耐力がつきました。
私は、今回、テント泊３日、ロッジ１泊で５日間、気力を振り絞って歩きとおすという体験をしました。ザックは日増しに重く感じましたが、スタミナを持続でき、満足しています。ＧＷの殆どを山に費やすことを理解し、協力してくれた家族には、感謝の気持でいっぱいです。
（みな子）

高尾の森づくりに参加しました

４月９日、１０日と日本山岳会の自然保護全国集会に参加しました。各地の自然を守る活動が報告され、岩手支部の小野寺氏は、早池峰は道路の開通によって自然破壊が進み、道路の閉鎖や迂回ルートの検討が行われていること。関西支部の田村氏が、大台ケ原のマイカー規制と利用調整地区の実現を求めて、全力を尽くしたいと発言。宮崎支部の前原氏は森づくりの取り組みについて「わくわくの森」と名づけて多くの市民を巻き込んで植樹したり、自然観察会、森の音楽会など多彩な取り組みの報告が印象的でした。北海道の自然児学校は大いに関心を集めました。
その後、各地からの意見交換があり、私も、北海道から委託を受けて、高山植物保護のためのパトロールを行っていることについて発言しました。
午後からは、ミュージカル「天狗のかくれ里」が上演され、感動的でした。
１０日は高尾の森の植樹祭。なんと４５０人も集まり、圧巻。今年植えた木は２６種類。オニグルミ、ヤマグリ、コナラなどでした。北海道では考えられない、急斜面での植樹なのです。小さな石がゴロゴロ落ちてくるし、私の靴は、ハイキングシューズで、雨でも降ったら、とても作業は出来なかったと思います。私も、汗まみれになりながら、斜面に穴を掘り、イロハモミジを５本、ヤマザクラを２本植えました。自分の植えた気が１０年後にはどのくらい大きくなるんだろうと想像しながらの作業、楽しくってはまってしまいます。
是非、北海道でも森づくりやってみたいと思いました。

「何があっても大丈夫」

櫻井よしこ著　新潮社　１５００円＋税

ニュースキャスターとして、ジャーナリストとして活躍する櫻井よしこさんの自伝です。第２次世界大戦直後の混乱の中、ベトナムの野戦

病院で生まれてからニュースキャスターになるまでの悩み、苦しみながら生きてきた姿を母との思い出と共に綴っています。おおらかな雰囲気を感じさせるのは、ベトナムの空気を吸ったからでしょうか？知的で、笑顔の美しい櫻井さんですが、家族の元に帰らなかった父との葛藤や、経済的に大変な少女時代には進学はあきらめようとしたことなどが、明かされています。「何があっても大丈夫よ」のタイトルは母の口癖から。自分の人生を他人のせいにせず、いさぎよく引き受けなさいという意味で、全てを甘受しながらも驚嘆するほどの前向きな姿勢を貫いた母の人生観がこめられていました。

父のいるハワイへの留学を決意したとき、人生の岐路に立たされたとき、元気づけられた言葉だったと記しています。父は不在であっても、母のたった一度きりの人生を大切に生ききろうとする情熱は、娘にも引きつがれていることが分かります。

大学を卒業しても、すぐには就職せず、自分にあった仕事を見つけ出す姿が素敵です。新聞社助手の頃に、女性上司の妥協せず厳しくも凛とした姿から、自分を磨いていくのが印象的。

人生は自分で切り開いていくものだと努力を惜しまない櫻井さんから大きな励ましをもらいました。

「在日」

姜尚中著　講談社　１５００円＋税

社会学者として、戦後民主主義や、平和問題などに積極的に発言を続けている著者の自伝です。

エピローグに「本書を書きたいと思った最大のモティーフは、朝鮮戦争の年に生まれて、半世紀あまりを経たひとりの「在日」二世が何を失い、何を獲得しえたのか、そのことを忘れえぬ人々の記憶と共に書き留めておくことにあった」とあり、読み書きが出来なくて、どんなにか口惜しい思いをした母や、失郷者として、精一杯生き抜いたおじさん、背骨が折れるくらい働いて死んでいった父ら在日一世に寄せる思いが胸を揺さぶります。

写真でみる姜さんは、怖そうなイメージでしたが、社会的は底辺で生きざるを得なかった人々へのあふれる優しさに共感しました。大学で、在日の仲間と触れ合うなかで、自分の内面世界に封じ込めてきた「在日」や「祖国」といった今まで、抑圧してきたものを一挙に払いのけ、悲壮な決意で永野鉄男を捨てて、姜尚中を名乗るのです。

今まで姜さんは在日のエリートだと思ってきましたが、見事に覆されました。ドイツ留学するまでは、在日であることで受ける差別や、理不尽さに押しつぶされそうになっていた姜さんの姿がありました。ドイツで自由闊達な友人、インマヌエルと出会い、その家族との交流を通して故郷と、異郷の狭間に生きる人々がいることに目が開かれるのです。世界史の中の「在日」ということについて考えられるようになったと記しています。きっと姜さん本来のおおらかさを取り戻せたのだと思います。

８０年代、指紋押捺拒否の埼玉県での第一号になります。支援する市民運動も盛り上がりましたが、１年を経過し、逮捕を覚悟してまでやる必要があるのかという思いは、私は当然だと思いました。まして定職のない姜さんの生活を誰が引き受けてくれるのでしょう。

牧師の土門先生は市民運動の仲間にこういうのです。「市民運動は国家と対峙するとき、敗北するに決まっているんです。でもそれをただ敗北と岳受け止める必要はないと思いますよ。負けて、負けて、負け続けて、しかしいつの日か勝てないけれども負けてもいない、そんなときがくるはずですよ。だから姜さん、今あなたが犠牲をこうむる必要はないのです。―姜さんがこんなに悩まなければならない状態を作っているわたしたち日本人にこそ、問題があるのですから」。本当にその通りです。日本人が戦争中朝鮮人や中国人にしてきた事実から、私たちは目をそむけてはいけないと改めて考えさせられました。

「母に歌う子守唄」わたしの介護日誌　落合恵子著　朝日新聞社　１３００円＋税

子守唄とは、あるがままの自分でいられる時空のこと。多発性脳梗塞、パーキンソン病、アルツハイマーとたくさんの病気を抱えた母を介護する落合さんの介護日誌。たとえ、言葉を失ってしまっても、本人には介護する側がしてあげている態度は伝わるものだそうです。母親の介護をしている私の友人の言葉です。「母の気持に沿った介護が出来た時、表情が優しいのよ」と。時々発する、母のことばに元気付けられる落合さん。「ここにいてほしい感じ」に泣かせるなあ。一日に一回こんな贈り物があればまだやれる！と思い、コーヒーをゆっくり味わいたいと思う日あり、介護は、張り詰めていても続かないなあと思います。
一人介護の大変さを、ヘルパーさんたちとの連携でこなしている日常が、短い言葉のなかに具体的に伝わります。わたしの主治医はわたしですの一節では、医療の現場にいる医師や看護師に率直に疑問やすれ違いを言葉にすることを提案しています。わたしも病院に勤めていた頃、インフォームドコンセントは十分に行われていると思っていましたが、伝わってないこともあったように思います。「患者さんは我が儘なくらいでいいんですよ」とも言われたことがあります。何を伝えたらいいのか、具体的でとても参考になりました。

「明治の音」　西洋人が聴いた近代日本　内藤　高著　中公新書　７８０円＋

イザベラ・バード、エドワード・モース、ピエール・ロチ、ラフカディオ・ハーンら幕末から、第二次世界大戦前に来日した西洋人が、日本の音に何を感じ、どう記録したのかをたどった文化論考。　旅行家のイザベラ・バードは、労働者たちの甲高くしゃべる声には不快感を覚えたが、アイヌたちの声には「低くて美しい、音楽的な」ととても好意的に評価しています。ハーンは、自然に近い音、さまざまな生き物の声や、山陰や焼津の海の音、そうしたものと非常に近いところにある、盆踊り歌や、音楽などに敏感に反応したと論じています。
三味線や蝉、下駄の音が騒音に聴こえたというのですから、育った環境や言葉の違いでこんなにも感じ方が違うんだと興味深かったです。

『エレニの旅』

ギリシャ　アンゲロプロス監督

１９１９年、ロシア革命で赤軍占領下のオデッサから脱出したギリシャ人の一団が、難民として帰国するところから始まります。オデッサで両親を失ったエレニは義父に育てられ成長します。しかし義父の息子と愛し合い、ひそかに彼の子ども（双子）を生みます。そのことを知らない義父は、エレニに自分との結婚を強要するのです。彼女は青年と共に町に逃げ、町のヴァイオリン弾きに助けられます。追いかけてきた義父は、心臓病で死にます。その恐怖と悲しみ。やがて青年は音楽の才で、アメリカへと旅立つのですが、エレニと子どもを呼び寄せようとするもかなわず、米国兵としてオキナワで戦死するのです。エレニは恩人のヴァイオリン弾きをかくまった罪で投獄されます。そして刑期を終えて釈放されると今度は内戦で、双子が敵味方に分かれて、二人とも死んでしまったことをしるのです。２０世紀は戦争に引き裂かれたエレニのような人生を送った女性が数多くいたことを静かに伝えます。映像は詩的で、絵画のようでもありました。せりふは少ないだけ、わたしたちに映像が語りかけてくるようでした。アコーディオンの音色が美しく悲しい。エレニの半生は涙ばかりでした。「旅芸人の記録」「アレクサンダー大王」などギリシャの歴史に材をとった作品が有名な監督の、母にささげた映画です。

「エレニの旅」から

イラクではまだ戦争が続いています。エレニの悲劇を繰り返してはならないと静かに伝えていました